

# 視点配置と文脈情報

## —認知文法からみた『雪国』とその英訳テクスト—

長谷部 陽一郎

### 1. はじめに

小説テクストにおける日英語の表現形式と視点の関係については、これまで様々な立場から論じられてきた。長年にわたり蓄積されて来た先行研究の成果に新たな知見を加えるのは容易ではないが、本稿では認知言語学の立場からアプローチすることで、この課題にあらためて取り組んでみたい。考察の対象となるのは、川端康成の小説、『雪国』の冒頭部分である。広く知られているように、ここでは雪国を走る汽車の中にいる主人公島村の眼前に広がる光景や心に浮かぶ感情や思考が描写されている<sup>1)</sup>。

これまで、池上(2007)や熊倉(2006)などが『雪国』冒頭部分とその英訳版を比較し、そこに日英語間の象徴的な差異が見いだせると述べてきた<sup>2)</sup>。しかし注意深く観察すると、これらの主張の妥当性には一定の適用範囲があることがわかる。日英語の表現形式と視点の問題に関する研究を一步進めるためには、これを明確にし、言語間の差異について過度にステレオタイプの思考に陥らないことが重要と思われる。

具体的には、『雪国』を認知文法の立場から分析することで、次の三点を明らかにしたい。第一に、表面的な構文形式の違いは日英語のテクストにおける「視点」

の根本的な差異を必ずしも反映するものでないということ、第二に、認知文法でいうところの「視点配置」の概念が、日常の言語のみならず、小説テクストの分析にも有用であること、そして第三に、視点配置の決定には、テクストの当該箇所を利用して可能な文脈情報が大きくかわるということである。これらのことを論じていくために、まずは次節で、これまで度々論じられてきた『雪国』原文および英訳テクストの書き出し部分の問題について触れておきたい。

### 2. 『雪国』の書き出しに関する問題

『雪国』の書き出し部分とその英訳は次のようになっている。

- (1) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。  
b. The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop.

日本語の原文では、語り手が主人公島村と同じ視点、すなわち汽車の中で窓の外を眺めるような視点で情景を描写している。これに対して英訳版では、トンネル

から抜けて雪国に入っていく汽車を、外の視点から俯瞰するかのよう描写していると複数の研究者が論じてきた。例えば池上(2007)は次のように述べる。

(英訳では)語り手は言語化している状況の中に身を置いていない。語り手は見る〈主体〉、汽車を中心とした状況は見られる〈客体〉である。見る者と見られる物という関係で、〈主体〉と〈客体〉との対立は鮮明である。

(池上2007:318)

また、熊倉(2006)は次のように述べる。

日本語ではこの汽車に乗っている人が「イマ・ココ」の時空で捉えた現実を文章化していると見ることができ、鳥瞰して大局的な立場から客観的に叙述している様に見える英訳との違いは大きい。

(熊倉 2006:593)

明らかに彼らは英訳版での“the train”が島村の乗る汽車を「外から」描写しているものと捉えている<sup>3)</sup>。しかし、“the train came out of the long tunnel into the snow country”という英文は、このような見立てだけを表すとは限らない。ここでの“the train”は、島村と同じ視点を共有する語り手が、自らが身を置く汽車を「内から」描写したものと解釈することも可能である<sup>4)</sup>。

このような用法は特に珍しいものではない。次の例は英語で書かれた短編小説の一篇であるが、同じ“the train”という表現が同様の形で用いられている。

(2) Then, all of a sudden, the wheels screeched and the train came to a halt. Those of us who had been jolted awake looked around, not quite sure where we were and how we had found ourselves here. There wasn't a station or a town near. The train stood in the middle of a field and the snow stretched gray and blue beyond a narrow patch of yellow light out the train windows.

そのとき、突然、車輪がきしみ、列車が停止した。叩き起こされた私たちは、どこにいるのか、なぜこんな状況になっているのか分からず辺りを見まわした。近くには駅も町もない。列車は野の真ん中で停まっていた。車窓から漏れた黄色い明かりが細い筋になっており、その向こうに青灰色の雪が続いていた。[訳は筆者による]

(Alexei Bayer “An Excursion”)

上記テキストでは“the train”という語が2度にわたって用いられているが(下線部)、いずれも語り手自身が乗る列車を「内から」指している表現である。

では、『雪国』の英訳テキストに関しては、なぜ“the train”が列車を「外から」描写した表現であると解釈されてしまうのか。確かに、“the train came out of the long tunnel into the snow country”という英文は、この一文だけを見れば俯瞰的・鳥瞰的な描写のように感じられる。とりわけ書き出しの一篇であるから、この文だけを切り離して考えてしまいやすい。しかし、私たちは『雪国』があくまで

小説テキストだという事実をふまえておかねばならない。日常の発話であれば、そもそも聞き手にとって既知でない対象を“the train”のような定名詞句で表現することは少ない。しかし、小説の冒頭において、主体的に捉えられた事物や概念が読者にとってあたかも既知であるかのように述べられることは珍しいことでなく、それは小説を読む上でのいわば約束事である。

このように考えてくると、『雪国』冒頭の英訳テキストに反映された描写の視点が日本語による原文のそれと完全に異なるというのは必ずしも正しくないと言える。もちろん、日本語と英語の背後にある知覚や認識に違いがないというわけではない<sup>5)</sup>。しかし、表面的な違いを捉えてそれが直ちに日英語の本質的な違いを象徴していると結論づけることは避けるべきではないだろうか。

### 3. 認知文法における視点配置の概念

では、あらためて認知言語学の立場から表現における視点の問題にアプローチしてみたい。そのためにはまず、視点という概念について、必要な定義を行う必要がある。

本稿では認知言語学という大きな枠組みの中でも特に認知文法 (Cognitive Grammar) と呼ばれる理論に基づいた分析を試みる。認知文法は、Ronald W. Langackerによって1980年代に提唱され、現在まで発展してきた理論体系である。認知文法ではあらゆる言語表現が認知主体すなわち話者の事態把握を反映していると考え、視点 (perspective) と

いう用語を「捉え方」(construal) という、より大きな理論的概念の下位カテゴリーとして扱う (Langacker 2007)。これは、認知文法における視点の問題の範囲が他の理論におけるそれよりもいくぶん限定されていること意味する。

また、認知文法は視点配置 (viewing arrangement) という考え方の重要性を強調する。視点配置とは、表現に対する主体の反映の度合いを示したものである。次の文を例にして考えてみよう。

- (3) a. 環境問題への積極的な取り組みが求められている。
- b. 環境問題にはもっと積極的に取り組むべきだ。
- c. 私は環境問題に積極的に取り組んでいる。

(3a)～(3b) はいずれも「環境問題への取り組み」という事柄について述べた文であるが、各文の概念構造において、発話者が自分自身の存在をどの程度「客体化」しているかという点において違いがある。(3a)において述べられているのは今日の社会で提起されている一般的な問題であり、そこで発話者の自己概念はほぼ完全に背景化されている。一方、(3b)で述べられているのは環境問題への取り組みに対する自らの意見である。発話者自身が言語表現の対象となっているわけではないものの、「～べきだ」という表現に見てとれるように、ここでの自己意識は(3a)の場合に比べて格段に高い。さらに(3c)では発話者自身が明確な言語表現の対象となっており、ここに至っては、「私」が言語表現の主体であると同時に

客体でもあるという状態が生じている。このような自己の概念の様々な投影のあり方を認知文法では視点配置と称するのである。

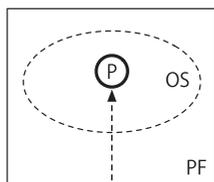


図 1

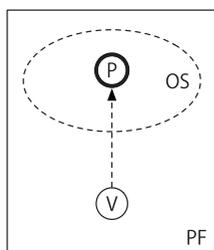


図 2

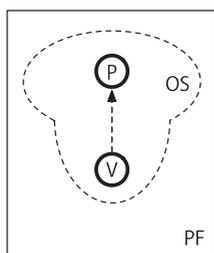


図 3

図1～図3は視点配置を図式化したもので、それぞれ例(3a)～(3c)に対応している<sup>6)</sup>。図中の要素Vは認知主体／観察者 (viewer) を表しており、要素Pは知覚の対象 (perceived object) を表している。破線で描かれた領域OSは観察者の客観

的把握領域 (onstage region) であり、実線で描かれた領域PFは観察者の知覚範囲となる領域 (perceptual field) である。VからPに向けられた矢印は視線の方向を表しており、OSの中でPやVが太線で描かれているのは、これらの要素が主体の概念領域の中で高い際立ちを得ていることを意味している。

例(3a)に対応する図1では、話者の視線がもっぱら客体的な対象概念に向けられており、自己の存在はPFの外に位置づけられている。例(3b)に対応する図2においても、やはり自己は焦点化されず、したがってOSには位置づけられないものの、図1の場合と異なり、VはPFの内側に組み込まれ、表現の意味を間接的に構成する要素としての位置づけを与えられている。そして例(3c)に対応する図3においてはVがOS内に組み込まれ、本来は観察者である要素が、同時に観察の対象となっていることを図式的に示している。

このように、認知文法では「視点」という概念を「捉え方」の側面の一つと位置づけ、他の理論より限定的に定義している。ただし、上で示した視点配置の考え方は、基本的に現実世界の言語表現のあり方を記述したものである。したがって、そのままの形で『雪国』の原文や英訳テキストに適用することはできない。そこで次節では、視点配置の考え方を小説の「語り」の視点に適用する方法について考えてみたい。

#### 4. 認知文法からみた「小説における視点」

ここで考察の対象を『雪国』冒頭部に

限定するならば、この物語の「語り手」による語りのパターンは大きく分けて二つある。第一に、語り手が島村とは別の視点を持つ存在である事実が背景化し、島村の視点からそのまま事態を描写しているように感じられるパターンである。次の(4)および(5)がこれに当てはまる。

- (4) 悲しいほど美しい声であった。高い響きのまま夜の雪から木魂して来そうだった。
- (5) 窓の鏡に写る娘の輪郭のまわりを絶えず夕景色が動いているので、娘の顔も透明のように感じられた。

これらは自由直接話法と呼ばれる用法に近い。あたかも登場人物の島村自身が発するような、あるいは思い浮かべるような事態叙述の表現であるが、語り手から島村への視点のシフトを明示的な言語表現によって示したりはしない。あくまで、語り手が自身に対する自己意識を静かに背景化させて行う「語り」のモードである。

第二に、「島村は」などの表現を伴い、あくまで語り手が島村とは別の主体であることを示唆しつつ述べるようなパターンがある。次の(6)と(7)がその例である。

- (6) そのような、やがて雪に埋もれる鉄道信号所に、葉子という娘の弟がこの冬から勤めているのだと分ると、島村は一層彼女に興味を強めた。
- (7) 娘の片眼だけは反って異様に美しかったものの、島村は顔を窓に寄せると、夕景色見たさという風な旅愁顔を

俄づくりして、掌でガラスをこすった。

これらは、いわゆる自由間接話法に近い。語り手は島村の存在を明示的に言語化している。しかしながら、語り手と島村は完全に切り離されている訳ではない。「興味を強めた」や「美しかった」などは、本来一人称的・主観的にしか把握し得ない感覚の表現である。したがって、(6)や(7)には、語り手が自らの存在を意識の片隅に留めつつ、島村になりかわる形で表現するような「語り」のモードがみとめられる。

このような二種類の「語り」を認知文法の方法論によって構造化するならば、図4および図5のようになる。ここで重要なことは、島村という主人公を観察者とした視点配置を、語り手を観察者とした視点配置が包み込むという二重構造が生じている点である。

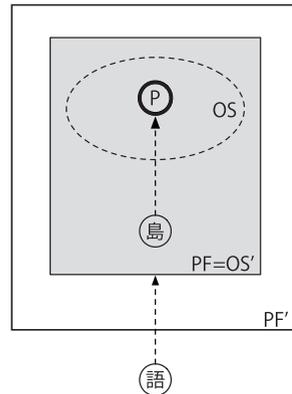


図4 自由直接話法的視点構図

図4は第1のパターン、すなわち自由直接話法的な視点配置を表す。図中の灰色部分は物語世界における島村(島)を

観察者としての視点配置における知覚領域であり、語り手(語)は自身の知覚領域(PF')の中でこれを客観的把握領域(OS')として位置づけている。

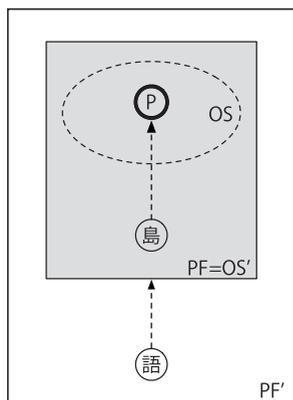


図5 自由間接話法的視点構図

図5は第2のパターン、すなわち自由間接話法的な視点配置を表す。図4との違いは、語り手(語)が、知覚領域(PF')の内側に移動していることである。要素が知覚領域の外側にあることは、観察者とその要素について意識を向けていないことを示唆する。一方、要素が知覚領域の内側にあることは、その要素に対して一定レベルの注意が向けられ、その要素の存在が直接的であれ間接的であれ表現の意味に関与することを示唆する。上の(6)と(7)には「島村は」という表現が含まれるが、そこに垣間見られる語り手の自己意識を、図5では観察者(V)としての「語り手」をPF'の内側に組み込むことで表しているのである。

なお、通常の言語使用における視点配置としては図1~3のようなものがあつた。小説の視点配置に関しても、理論的

には図1~3に対応するような3つの構図が考えられる。しかし、『雪国』で観察される表現は多くの場合、図4(図1に対応)と図5(図2に対応)の構図をとり、図3に直接対応する表現は見られない。これは『雪国』においては語り手の存在が客体として(つまり、「私」などの表現を用いて)表現されることがないという事実による。

もちろん、小説によっては、『雪国』とは異なる様々な視点配置が用いられる。いわゆる一人称小説は、語り手自身が「私」として客体化された視点配置をとる。また、『雪国』と同様に三人称的な語り手を有する作品でも、図4のような自由直接話法的視点配置を全くとらない(=登場人物になりかわって事態を描写するような表現を含まない)場合もある。

実際のところ、『雪国』の語りも、常に図4と図5で表される2種のパターンにとどまっている訳ではない。

(8) しかし、ここで「娘」と言うのは、島村にそう見えたからであつて、連れの男が彼女のなんであるか、無論島村の知るはずはなかつた。

(8) は、先に(6)で示した自由間接話法的表現の直後に続く一節である。島村の心情を述べる中で用いた「娘」という表現の背後にある動機を述べているのだが、結果的に語り手が自身の言語表現を参照する陳述となっている。そこには、図4や図5では必ずしも表しきれないほど高い自己意識がある。

以上のような視点配置の変化は『雪国』という作品の豊かな情感や立体的な構成

に大きく貢献している。このような特徴のかなりの部分が英訳版においても表面的な形を変えつつ、写し取られていることを次に見ていきたい。

## 5. 文脈情報の重要性

先に『雪国』の書き出しの例を用いて示したように、構文的差異は必ずしも視点配置の違いを意味しない。また、「日本語は主観的で一人称的な見えや思考をそのまま言語化するのに対して、英語では客観的で分析的な把握を言語化する傾向がある」という分析の度外れな適用には注意が必要である。条件さえ整えば、英語においても主観的で一人称的な見えや思考を表現することはできる。問題はその条件がどのようなものかである。

繰り返しになるが、日本語と英語における事態把握の傾向に違いがあることを否定する訳ではない。例えば、『雪国』の次のような箇所において、日本語の原文と英文の構文的・発想的な差異は明らかである。(10a)は(6)を再掲)

(9) a. だから彼女が駅長に呼びかけて、  
ここでもなにか真剣過ぎるものを見せた時にも、物語めいた興味が先きに立ったのかもしれない。

b. When, therefore, the girl called out to the station master, her manner again suggesting overearnestness, Shimamura perhaps saw her first of all as rather like a character out of an old, romantic tale.

(10) a. そのような、やがて雪に埋もれる鉄道信号所に、葉子という娘の弟

がこの冬から勤めているのだと分ると、島村は一層彼女に興味を強めた。

b. Yoko's brother would be working at this signal stop, so soon to be buried under the snow— somehow that fact made the girl more interesting to Shimamura.

(9)の原文では「物語めいた興味」の主体が明記されていないのに対して、英訳では“Shimamura perhaps saw . . .”のように明示的な主語が付加されている。また、(10)の原文では「島村は一層彼女に興味を強めた」と、島村を主語ないしは題目として表現しているのに対し、英訳では“that fact made the girl more interesting to Shimamura”と、島村が前置詞句の中で言及される形になっている。

これらの例で英訳表現が原文のそれと大きく異なるのは、「XがYに興味を抱く」という事態が、日本語的な発想においては認知主体の中で自発的に生起する事象であるのに対して、英語的な発想では何らかの契機となった事態の「結果」として生じたものと見なすことに起因すると考えられる。つまり、英語的な発想で見れば、(9a)の「物語めいた興味」は結局のところ「彼女」に対する島村の主体的な見立て(X sees Y as  $\alpha$ )の結果であり、(10)の「一層彼女に興味を強めた」は、当該の事実が島村の興味を喚起した結果( $\beta$  makes Y more interesting to X)と解釈できるのである。

このように、日英語には構文形式や発想に明らかな差がある。しかし、認知文法における視点配置の観点からすると、

両者の間に常に大きな溝があるわけではないというのが本稿の主張である。日本語では主体の「今、ここ」に基づいた一人称的な視点から描写されるのが基本で、英語では三人称的・客観的な描写が好まれるという認識は広く共有されている。しかし、文脈情報による支えがあれば、英語でも一人称的、主観的な視点からの描写は行われる。

例えば、(1) で示した『雪国』の書き出しに続く部分とその英訳は次のようになっている。

(11) a. 向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷気が流れこんだ。

b. A girl who had been sitting on the other side of the car came over and opened the window in front of Shimamura. The snowy cold poured in.

(11b) の下線部 “the other side” および “poured in” という表現は (11a) の「向側」「流れ込んだ」に対応しているが、いずれも、島村と同じ視点に立つ語り手の主観的・一人称的な表現である。先行する文脈の中で島村と同化した語り手の視点が確立されており、そのことがこのような表現を可能にしている<sup>7)</sup>。

また、次のような例もある。

(12) a. もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に吞まれていた。

b. It's that cold, is it, thought Shimamura. Low, barracklike buildings that might have been railway dormitories were scattered here and there up the frozen slope of the mountain. The white of the snow fell away into the darkness some distance before it reached them.

(12a) では、島村が列車の外に見た景色がその「見え」のままに描かれており、この視点配置は英訳テキストでも踏襲されている。(12b) の下線部は島村を基点とした空間表現となっており、そこでは語り手が島村と同化したような、自由直接話法的視点配置が採られている。“... , thought Shimamura” という表現により、あらかじめ視点の定位に関する情報が十分に与えられているため、島村と同化した語り手の一人称的な視点からの叙述が可能になっているのである。

もちろん原文と英訳との間に表面的な差異が生じることはある。それが顕著なのは、英訳テキストでは文脈情報に曖昧性が生じるとき、あるいは逆に特定の視点が前景化して曖昧性が全く生じ得ないような場合である。次の (13) を見てみよう。

(13) a. それゆえ島村は悲しみを見ているというつらさはなくて、夢のからくりを眺めているような思いだった。不思議な鏡のなかのことだったからでもあろう。

b. For Shimamura there was none of the pain that the sight

of something truly sad can  
bring. Rather it was as if he  
were watching a tableau in a  
dream—and that was no doubt  
the working of his strange mirror.

(13a) 下線部の「不思議な鏡」とは、島村が目にした、列車の窓に映り込んだ女の像を指すのだが、英訳テキストでは、“strange mirror” という表現に“his” という原文にはない所有格代名詞が加えられている。ここには、「不思議な鏡のなかのことだったからでもあろう」という原文の視点配置をより正確に訳文に反映させるという目的が感じられる。仮に“his”ではなく“the”を用いたならば、列車の窓に移った像を「不思議な鏡」という表現で叙述する主体が島村自身なのか、それとも語り手であるのかが文脈情報からはっきりと分からない。そこで、この表現の主体があくまで語り手であること、言い換えると自由間接話法的な視点配置が採用されていることを明確にするため、あえて“his strange mirror”という表現が用いられたと考えられるのである。

一方で、文脈から視点配置が一意に定まるようなとき、日本語の原文に含まれ、かつ視点に関わるような表現であっても、英語テキストでは省略される場合がある。

(14) a. 彼女等が汽車に乗り込んだ時、なにか涼しく刺すような娘の美しさに驚いて目を伏せる途端、娘の手を固くつかんだ男の青黄色い手が見えたものだから、島村は二度とそっちを向いては悪いような気が

していたのだった。

b. When the two of them came on the train, however, something coolly piercing about her beauty had startled Shimamura, and as he hastily lowered his eyes he had seen the man's ashen fingers clutching at the girl's. Somehow it seemed wrong to look their way again.

(14b) の下線部では、原文にある「島村は」が省略されている。したがって、ここでは英訳表現の方がむしろ主観的・一人称的な響きを含んでいる。このような選択がなされたのは、文脈の中で島村の視点への定位を促す情報が明確に示されており、文単位でなく流れの中で視点配置の対応を考えたならば、殊更にそれを強調する必要がなかったからであろう。

以上のように、日英語における表現方法の表面的な差異は、必ずしも視点の違いを示すのではなく、ときに言語間で視点配置を対応させるための「装置」としても機能するのである。

## 6. まとめ

本稿では、小説テキストにおける日英語の表現形式と視点の関係について、認知文法の立場から考察し、ささやかな提案を行った。英語と日本語との間に構文的・発想的な違いは確かにあるが、「視点配置」の観点から見れば、両言語によるテキストは必ずしも鏡像的に正反対の性質を示すわけではない。従来、『雪国』の原文と英訳にみられる相違点は、両言語の「視点」が本質的に異なることの象

徴として論じられてきた。しかし実際には、そのような違いがむしろ共通した視点配置を構築するための媒体として機能している場合がある。

### 注

- 1 ここでは『雪国』の新潮文庫版p.5～p.12を「冒頭部」とする。
- 2 本稿では『雪国』の英訳版として、Edward Seidenstickerによる *Snow Country* (Vintage International, 1956) を用いる。
- 3 筆者自身も長谷部 (2012) において同様の見解を示したことがある。実際のところ、英語を母語とする読み手であってもこの文を俯瞰的な表現として解釈する可能性は高い。しかしここで着目したいのは、たとえ可能性としてであれ、英訳版が日本語の原文と同様の視点配置を許すという点である。
- 4 糸井 (1982) は、小説テキストにおける日本語の「夕」形や英語の過去形には、ある種の視点を示唆する役割があると論じている。(1a)と(1b)に「内からの視点」を見出す解釈は、まさにこの事実の上に成り立つと考えられる。
- 5 ここでは詳しく触れないが、「国境」をあえてそのまま訳さないことなど、読者の文化的背景への配慮に基づく相違もある(巻下1997: 85-86)
- 6 厳密には(3)と図1～3との対応関係はそれほど単純なものでない。ここでは説明のためにあえて単純化しているが、詳細についてはLangacker (2008)などを参照のこと。
- 7 (11b)は『雪国』の書き出しを内的な視点からのものだとする解釈の論拠とな

り得る一節でもある。

### 参考文献

- 長谷部陽一郎. 2012. 「内からの視点と外からの視点: 認知言語学に基づく英語教育に関する試論」『コミュニカーレ』第1巻, 1-27.
- 池上嘉彦. 2007. 『日本語と日本語論』東京: ちくま書房.
- 糸井通浩. 1982. 「「歴史的現在(法)」と視点」『京都教育大学国文学会誌』第17巻. 47-55.
- 熊倉千之. 2006. 「川端康成『雪国』地文の視点とその認知表現について」『日本認知言語学会論文集』第6巻, 593-596
- Langacker, Ronald W. 2007. *Cognitive Grammar*. In D. Geeraerts and H. Cuyckens (eds.) *Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*. Oxford: Oxford University Press, 421-462.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- 巻下吉夫. 1997. 「翻訳にみる発想と論理」『文化と発想とレトリック』東京: 研究社, 1-91.

[付記] 本稿は2014年5月31日に行われた表現学会シンポジウム「表現と視点」での研究発表に基づいている。本研究のきっかけを与えてくださり、また内容について重要な示唆を下さった糸井通浩先生に感謝申し上げます。

(同志社大学)